

女子大生を主体的な学びに誘う初年次教育に関する一考察

— 固定概念から読書を解放し理解と表現の一体化を図る —

船 水 周*

A study of first-year education for students who are invited
to study at the College of Women

— Free reading from fixed concepts to integrate understanding and expression —

Hiroshi FUNAMIZU*

Key words : 固定概念	Fixed concept
言語思考力	Language Thinking Skills
不易流行	Fueki epidemic
批判的思考	Critical Thinking
経験知	Experience knowledge

1 初年次教育の学びとは

大学の学びは一言で言えば課題解決に尽きる。唯一絶対の正解はない。問いに対してどんな答えを導き出すか、常に問われる。

学生は、「納得解」を見付け出し、それを他人も納得できる「最適解」にまで高めなければならない。事象を多角的に観察して、問いや仮説を立て、それを検証したり、読書や対話によって「納得解」を吟味・検討したりする。

一方、高等学校までの学びには唯一絶対の正解がある。教科書が学習指導要領に準拠しているからだ。学習指導要領は全国どの地域でも一定水準の教育が受けられるよう、小学校、中学校、高等学校等の教科・領域目標や内容などを定めた国の基準である。だから教科書には絶対の正解が求められる。正解を学び取り、試験で上手く解答できれば希望の進路へ道が開かれる。これは既にある問題と正解を知り、効率よく覚える学びである。

しかし、高等学校までの学びはここまでである。大学の学びには、教科書の内容等を拘束する学習指導要領がない。大学設置基準や関連法規等（例

えば教職課程の認定を受けるためには、教育職員免許法及び同法施行規則、学習指導要領等の改訂を踏まえて教員養成を行う必要があること）に規制される以外、科目担当者はフリーハンドで授業ができるようになっている。

大学の初年次教育はそれ以降の学びの土台を形成する、かけがえのない学修期間である。専攻分野の違いに関わりなく、学生は学問に対する関心・意欲を持ち続けて知識・理解を深め、技能・能力・態度を身に付けていく。その原動力になるのが読書という主体的行為である。

論理的思考力や想像力を鍛え、語彙力を豊かにするのも読書の影響が大きい。大学の学びである課題解決は読書に裏付けられてこそ可能になる。読書は初年次教育における必須の行為で、生涯を生き抜く力となる。

これを踏まえ、本稿では本学1年生における読書の現状とその改善策について検討していく。

2 本学1年生の読書の現状

2016年12月に公表された「中央教育審議会答申」は、今後の児童生徒に育成する資質・能力として、「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・

*東北女子大学

表現力等」の育成、「学びに向かう力・人間性」の涵養を求めた^(注1)。

資質・能力は生涯にわたり磨かれ続けていく。その意味で読書が資質・能力の向上に果たす重要性は疑う余地がない。これは学習指導要領に拘束されない、大学以降の学びでも例外ではない。むしろ重要性は一層増してくる。

にもかかわらず、読書嫌い・読書離れ現象がメディア等で報じられることが少なくない。

文化庁・「国語に関する世論調査」(2013)は、次のように分析する^(注2)。

「1か月に読む本の冊数について」の質問では、「読まない」割合が全体の47.5%で約半数を占め、「1,2冊」34.5%、「3,4冊」10.9%、「7冊以上」3.6%と続く。

「読書量が減っているか、増えているか」の質問では、読書量が「減っている」65.1%、「変わっていない」26.3%、「増えている」7.3%。

このうち「減っている」と答えた人の理由では(選択肢から2つまで回答)、「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」割合が51.3%と最も高く、「視力や健康上の理由」34.4%、「情報機器で時間が取られる」26.3%と続く。

「読書をすることの良い所は何だと思うか」の質問(選択肢から3つまで回答)では、「新しい知識や情報を得られること」が61.6%と最も高く、「感性が豊かになること」40.0%、「豊かな言葉や表現を学べること」38.6%、「想像力や空想力を養うこと」31.2%、「感動を味わえること」26.4%、「楽しく時間を過ごせること」25.5%と続く。

こうした読書離れ現象の背景にはどのような原因が考えられるか。

全国大学生生活協同組合連合会・「学生生活実態調査」(2016)は、次のように分析する^(注3)。

○小遣い、仕送り等の減少に対して、アルバイトで生活の充実をはかっている。

○調査時のアルバイト就労率は71.9%。アルバイ

トの1週間の就労時間は平均時間12.5時間。

○1日の読書時間は24.4分。1日の読書時間「0」は49.1%。男女別では男子の平均時間が28.0分、女子20.3分。

アルバイトの有無でみると、就労している学生の平均読書時間が22.1分に対して、就労していない学生が30.6分とやや長い傾向がある。

○大学の予習・復習・論文など大学の勉強時間は52.8分。文系37.0分。勉強時間もアルバイト就労者の平均時間が短い傾向が見られ、就労者は全体で13.4分短い。

○スマートフォンの1日の利用時間の平均は161.5分。利用時間「0」は1.3%に過ぎず、ほぼ全員が利用している。

文化庁及び全国大学生生活協同組合連合会による2つの調査結果から、大学生の読書離れの現状が改めて浮き彫りにされた。背景にはスマートフォンの普及やアルバイト就労の増大によって、読書時間が浸食されていることが推測できる。大学生の生活時間に占める読書時間の位置づけが、相対的に後退している事実もそれを裏付けている。

だが、これは全国的傾向である。本学の学生にそのまま当てはまるわけではない。共通点のほかにズレや偏りなど、違いが見られる可能性も否定できない。

そこで上記項目に新たな項目を付け加え、筆者が担当する教養科目「論作文技術(2)」の履修生(大学1年生)を対象に調査を実施した。

調査日は2017年10月16日。対象者は欠席者を除いた女子履修生48名。なお、同じ学生が2017年度前期に履修した、教養科目「論作文技術(1)」[国文学]の授業レポートも考察の対象にした。調査結果は次のとおり。

「1か月に読む本の冊数について」の質問では、「読まない」割合が全体の54.15%(26名)で、「1,2冊」43.7%(21名)、「7冊以上」2.0%(1名)、「3,4冊」0%(0名)と続く。

「読書量が減っているか、増えているか」の質問では、読書量が「減っている」79.1%(38名)、

「変わっていない」6.2%（3名）、「増えている」14.5%（7名）。

このうち「減っている」と答えた人の理由は（選択肢から2つまで回答）、「情報機器で時間が取られる」割合が68.7%（33名）と最も高く、「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」39.5%（19名）、「視力や健康上の理由」2.0%（1名）と続く。

「読書をする事の良い所は何だと思えるか」の質問（選択肢から3つまで回答）では、「新しい知識や情報を得られること」が56.2%（27名）と最も高く、「感性が豊かになること」62.5%（30名）、「豊かな言葉や表現を学べること」72.9%（35名）、「想像力や空想力を養うこと」64.5%（31名）、「感動を味わえること」25%（12名）、「楽しく時間を過ごせること」12.5%（6名）と続く。

「予習・復習・課題（論文、レポート）など大学の勉強時間は1日何分か」の質問では、「0分」14.5%（7名）、「60分未満」50%（24名）、「60~90分」27.0%（13名）、「120~180分」8.3%（4名）。平均43.4分である。

「情報機器（スマートフォン・ガラケー・パソコン等）を所有しているか。1日の利用時間は何分か」の質問（複数回答）では、「スマートフォン」所有100%（48名）・利用時間平均160.5分、「ガラケー」所有0%（0名）・利用時間平均0分、「パソコン」所有22.9%（11名）・利用時間平均42.7分、「ゲーム機」2.0%（1名）・利用時間平均120分。

「高校時代の古典の授業（教科）は好き／嫌い／好きでも嫌いでもない」の質問では、「好き」37.5%（18名）、「嫌い」20.8%（10名）、「好きでも嫌いでもない」41.6%（20名）。

「授業が好き／嫌い」の理由は次のとおり。

【授業が好き】18名

※複数回答あり

- ①話の内容が理由…13名
- ②教師の指導・性格が理由…4名
- ③古語・表現・文法が理由…4名

【授業が嫌い】10名

※複数回答あり

- ①話の内容が理由…0名
 - ②教師の指導・性格が理由…1名
 - ③古語・表現・文法が理由…10名
- 【好きでも嫌いでもない】20名

※苦手意識等あり

- ①話の内容が理由…1名
- ②教師の指導・性格が理由…3名
- ③古語・表現・文法が理由…9名
- ④その他…4名
- ⑤無回答…3名

その他に「好きか嫌いになるほど古典を授業でやらなかった」「古典は1年生のときに少しだけやり2年生から選択していなかった」という理由をあげる学生がいた。

「古典は読む価値があると思うか」の質問では、「ある」85.4%（41名）、「ない」14.5%（7名）。

「価値がある／ない」理由は次のとおり。

【価値がある】39名

※複数回答あり

- ①教養（知識）が豊かになる…23名
- ②教訓（指針）が得られる…9名
- ③考え方等の不易流行がわかる…14名
- ④無回答…2名

【価値がない】7名

- ①今は（昔の言葉や文章を）使わない…5名
- ②古典を読む価値が見つけられない…1名
- ③無回答…1名

「前期、国文学の授業を履修したか」の質問では、「履修した」85.4%（41名）、「履修しなかった」14.5%（7名）。

「履修した／しない」理由は次のとおり。

【履修した】41名

※複数回答あり

- ①単位を取得するため…14名
- ②授業内容に興味関心がある…9名
- ③（国語・古典が）得意、好きである…11名
- ④教養を身につけるため…5名
- ⑤無回答…4名

【履修しなかった】7名

- ①(国語・古典が) 苦手である…1名
- ②別の科目を履修した…4名
- ③無回答…2名

「あなたは読書が好きか／嫌いか」の質問では、「好き」95.8% (46名)、「嫌い」4.1% (2名)。「好き」な理由は次のとおり。

※自由回答(15名) ※複数回答あり

- ①知らない知識が得られる…2名
- ②興味がある本に没入(頭)できる…9名
- ③活字から想像して読める…3名
- ④励まされ、考える言葉に出会える…2名
- ⑤自分のペースで読める…2名
- ⑥幼い頃から読書する環境があった…1名

ちなみに「嫌い」な理由に「活字が多い文章は苦手である」と答えた学生がいた(2名)。

「『読書をしたということ』についてどう考えているか」の質問では、「単行本をほぼ最後まで読み切ること」70.8% (34名)、「単行本の一部、雑誌や新聞記事など一部でも読むこと」29.1% (14名)。

それぞれを支持する理由は次のとおり。

「単行本をほぼ最後まで読み切ること」を支持する理由:「全ページ読まずに一部だけ読むと大事な部分を読み飛ばしてしまったのではないかと不安になる」「単行本の一部でも短編なら『読書をしたということ』になるが、長編だと『読書をしたということ』にはならない」「最後まで読まないとその本のすべてを理解することはできない」「最後まで読まないストーリーが気になってしまう」。

「単行本の一部、雑誌や新聞記事など一部でも読むこと」を支持する理由:「感想を言ったり、書いたり、考えたりすることも含めて読書だと思う」「単行本を1冊読むのも確かに達成感はあるしいいことだと思うけど、(略)読書に手をだせない人や時間をとれない人は少し読むだけでも違うと思う」「活字を読むということは自分の頭で想像する力がつく。例えそれが短い文章であっても活字を読むことに変わりはない。一部を読み、その中で自分のためになる一行が見つかったとしたら、それは立派な読書であると思う」。

最後の「もしも身近で関心・興味がある本を目にしたら読みたいと思うか」という質問では、「思う」100% (48名)、「思わない」0% (0名)。

以上、3つの調査結果から本学1年生の学びの現状について次のように総括した。

【整理】

(1) 本学1年生の4割は月に1,2冊程度本を読む一方、5割は全く読まない。これは全国傾向(以下「全国」と略記する)と大差がない。

(2) 読書量の増減について、本学1年生の8割が減っていると認識している。理由のトップは「情報機器に時間をとられる」(7割)、次が「勉強等が忙しくて読む時間がない」(4割)である。

全国と比較すれば、減っている認識(7割)では変わらないが、理由の順位が「勉強等が忙しくて読む時間がない」(5割)、「情報機器に時間をとられる」(2割)と逆転する。

(3) 本学1年生は読書の良さを「豊かな言葉や表現を学べること」(7割)、「感性が豊かになる」(6割)、「新しい知識や情報を得られること」(5割)と答える。これに対し全国は「新しい知識や情報を得られること」(6割)、「感性が豊かになる」(4割)、「豊かな言葉や表現を学べること」(4割)と答えている。

(4) 1日の勉強時間(予習・復習を含む)では、本学1年生は「60分未満」(5割)、「60~90分」(3割)で平均43.4分。他大学の文系の平均37.0分と比べて大差がない。

(5) 本学1年生はスマートフォンを100%所有する。1日の利用時間は平均160.5分である。他大学もほぼ全員が所有し、利用時間も平均161.5分で大差がない。

【考察】

本学1年生の9割以上は読書を好きと答えるが、5割は本を読まない。読んでいる学生でも月1,2冊にとどまる。背景にはスマートフォンの利用やレポート作成(勉強)等に時間をとられ、本を読む時間がないことが窺える。勉強時間は1日平均43.4分。自由時間の大半をスマートフォン等に

費やしていると推定できる。

大学設置基準では、1単位の授業科目に45時間の学修で内容を構成することが標準である^(注4)。通常の授業は2単位なので、予習・授業・復習を合わせて90時間が必要となる。実際の授業時間は90時間の1/4(22.5時間)だから、残りの3/4(67.5時間)は予習・復習で補うことになる。

川嶋太津夫(2017)は、「現状では単位制度というのは形骸化していると言わざるを得ない」と述べる^(注5)。確かに他大学生や本学1年生の1日の勉強時間を考えると、大学設置基準が示す標準時間(理想)と学生が実際に費やす予習・復習の時間(現実)の間には大きな隔りがある。

しかし、大学の教育内容のレベルと質を担保するには、大学設置基準が示す標準時間に実質的に近づけていく努力や工夫が欠かせない。

解決策として、学修を「予習」「授業」「復習」(3要素)から「授業」「予習・復習」(2要素)に変え、両者の間を読書課題で関連付ける。「予習・復習」はどちらか一方を選択し、集中して取り組む。そうすれば、学修の一貫性を保ちながら、読書時間を確保でき、時間短縮にもつながる。アクティブ・ラーニングはそのような主体的学修を後押しする装置である。

「読む」「書く」「話す」「聞く」活動は、音声言語と文字言語、理解活動と表現活動に分けられるが、それぞれに通底するのは言語思考力である。

藤原宏(1987)は主張する。「すべての言語活動は言語を使う主体者の思考作用とともに成り立っている。言語を使うことは思考することだと言ってよいほど、言語と思考との関係は密着したものである。聞き話す言語活動をする時も、文や文章を読み書きする時も、その時々に伴う思考力に裏打ちされているものである」^(注6)。

また筆者の「調査」では、「感想を言ったり、書いたり、考えたりすることも含めて読書だと思う」という学生の意見があった。

理解活動(聞く・読む)と表現活動(話す・書く)は言語思考力を介して絶えず往還している。

上記学生の意見は極めて理に叶っている。「読

む」「書く」「話す」「聞く」活動を有機的に関連付ければ、ムリ・ムラ・ムダが省かれて時間の節約になり、理解と表現の相乗効果が期待できるからだ。もちろん、授業は学生の知的欲求を満たし、テンポのよさや面白さを保障する必要がある。

3 読書を固定概念から解放

前項で学修の一貫性は「授業」と「予習・復習」の間を読書課題で有機的に関連付け、一体化することで保たれると述べた。だが、それには読書に対する思い込みや先入観、常識を解体しなければならない。課題解決に資するよう、読書を固定概念から解放するのである。筆者は読書の概念を次の視点で捉え直すことを提案する。

①「文章に触れる＝読書をした」と見なす

本学1年生は本来、読書が好きである。関心を引く本が身近にあれば手にとり、読書の良さを「言葉や表現を学ぶこと」と答える。高等学校の古典でも内容価値に対する評価は高い。文法の暗記に偏り、魅力的な作品に触れる機会が少ない授業にこそ問題の根源があると推察できる。

「読みたいのに読む時間ない」。これを解決するには、「一冊読み切る＝読書をした」とせず、「文章に触れる＝読書をした」と見なす。この場合、「文章に触れる」とは、先述の「読む」「書く」「話す」「聞く」活動の一体化を意味する。

②読書の概念を広げ情報や知識を磨く

現在は活字情報が多様化し、本、雑誌、新聞、辞書・事典、テレビ、スマートフォン、PC等、様々なメディアから情報が入手できる。

にもかかわらず、活字離れ＝読書嫌いになるのは本だけを読書の対象と認識しているからだ。活字情報の括りで考えれば、メディアの違いにこだわる必要はない。大切なのは活字情報を多角的にとらえ、その本質を見抜けるかどうかだ。

今、学生の大半はスマートフォンを利用する。これを学修に活用しない手はない。本以外の活字情報も読書の対象とするのは現実的な考えである。

情報や知識は使えなければ意味がない。常に実践に活かし、磨き続けていくようにすべきだ。

③本は最後まで全部読まなくてよい

本学1年生の調査（以下「調査」と略記する）に次のような意見があった。①「全ページ読まずに一部だけ読むと大事な部分を読み飛ばしてしまったのではないかと不安になる」、②「最後まで読まないとその本のすべてを理解することはできない」、③「最後まで読まないストーリーが気になってしまう」等。確かにと思う。だが、①と②は強迫観念が強すぎる。③はストーリー型の本なら読み飛ばしは難しいかもしれないが、面白くなければ途中でやめることもできる。そもそも全部を完璧に理解するなど不可能である。幻想にすぎない。

本に限らず活字情報は原則、問い（問題意識）を持って読む。そして答えになる箇所や心に響く言葉を見つけたら、そこだけ繰り返し読む。他は無理に読まない。自分の心が反応する部分を繰り返し読んだり考えたりすれば、今の自分に必要な情報や知識が得られる。読書に時間がとれない学生であれば、重要とは思えない、面白くない部分は思い切って読み飛ばす勇気と覚悟が必要だ。

④目的に応じて適切な読書方法を選ぶ

大学1年生にいきなり「基本書や原著を読め」と勧めたところで容易には理解できない。結局楽しくないので、挫折してしまう。

それが曲がりなりにも理解できるようになるのは、相応の知識レベルに達してからである。

その分野の初心者であれば、適切な入門書や教科書が必要になる。昨今、マンガ・コミック、新書、文庫等が出版される機会が多いが、「要約にすぎない」「本質がつかめない」「超訳にすぎる」等の批判も目にする。しかし、初心者や苦手意識がある人には全体像がつかめる、圧倒的にわかりやすい入門書になり得る。

「あれはいい」「これはよくない」と短絡的に決めつけず、今の自分の知識レベルに合った読書方法を選択すべきである。読書の価値は自分の判断

基準でしか評価できないからだ。

読書を固定概念から解放すれば、逆に魅力的な文章や言葉に触れる機会が多くなる。こうした発想の転換こそ読書という行為を前へ進めていく。

4 古典に学ぶ不易流行

大学生を対象にしたベネッセの調査（2005）は、高校時代の現代文は約6割が好きなのに、古典は嫌いな生徒が多いと分析する^(注7)。

本学1年生の調査では、古典が嫌いな理由に文法解析（品詞分解等）に偏る授業をあげるが、内容価値への評価は高い。古典自体、嫌いではない。

実際、筆者が担当する教養科目「国文学」は、作品の背景を理解して訳文と原文を読み、古典の面白さや魅力に気づかせる授業をねらいとする。「古典は古くならない」「読み返すたびに理解が深まり発見がある」「その時々自分に応じてくれる」等、履修者自身に実感してほしいからだ。

小林秀雄は言う。「あなたが今いくら読んだって、あなたの今のレベルしかわからないよね。（中略）今のあなたがわからなくても、経験を重ねて別のあなたになったらわかるかもしれない」「古典を読むというのは、その場その場の取引です。だから、二度も三度も読めるのです」^(注8)。

実に明快かつ納得できる古典論だ。事実、国文学の授業レポートでは、本居宣長の『うひ山ぶみ』〈「怠りてつとめざれば功はなし」他^(注9)〉に共感する学生の言葉がそれを実証している。

【原文例】

「^{せん}詮ずるところ学問は、ただ年月長く^う倦まずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかかはるまじきこと也。いかほど^{おこた}学びかたよくても、^{いさをし}怠りてつとめざれば功はなし。」

【意見・感想】

○「才能のない人でも、怠けずに励み努めさえすれば、それだけの成果はあがるものである」という言葉が好きだ。才能がない、出発が遅かった、時間がないなどの言い訳はいくらでもあるが、それが分かっているのなら、その分努力しようと思

える力強い言葉だ。

○勉強（学問）というのは、何歳からでも始めることが出来るし、ここで終わりというゴールも存在しない。才能があるなしにかかわらず大切なのは努力する力（やり抜く力）だと思う。挫折することなく勉強に励む努力を怠らないようにしていきたい。

○何事もやってみなきゃ始まらないという言葉があるように、学問も挑戦してみないと上達はできな感じ、『うひ山ぶみ』にはとても共感した。

○「時間がないからできなかった、みんなより覚えるのが遅いから、とって勉強しない人は、ただ「勉強しよう、という意識がないだけだ。これは私自身も当てはまることなので、読んだとき、核心をつかれたようでドキリとした。

○本居宣長は、自由であることを述べており、大変納得できるものであった。それと同時に、学ぶ方法に正解はないと知って、心が楽になった気がした。正しい方法でなければならないというような固定概念にとらわれる人は、日本人では特に多いように感じられる。もっと早くからこの文章を読んで、自由に学べたら良かった。

○「どう学問をやるかは、他人がこれと押し付けることはできない。自分が選ぶべきものである」「好きでもないことや不向きなことをやるのでは、どんなに努力しても、その成果は少ない」という言葉は、まさにその通りなのではないかと思った。

同様に、松尾芭蕉の俳論、「不易流行」「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」^(注10)に関する学生の意見・感想を紹介する。

【原文例】

「師の風雅に、万代不易あり、一時の変化あり。この二つにきはまり、その基もとい一なり。その一といふは、風雅の誠なり。」

【意見・感想】

○自分で新しい事にとりくんだり、自分の主観にとらわれることなく、対象をよく観察することはとても大事だと思った。人間関係や他の芸術にあたって同じようなことが言える。

○「真に誠を追求する者は、現在の自分の境地に安住することはできず」とある。これを読んで確かにスポーツでも芸術でもトップクラスの人たちはインタビューを受けても自分に満足しているという人は見たことがないと思った。

○「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」。この話を読み、私は自分がいかに物事を理解したと思込んでいるかということがわかった。勉強で、「なんとなくわかったからいいや、と思って、先生に質問しないことが多い私。しかし、そこで先生に質問すると、理解が深められ、思込みもなくなるのではないか。

○物事には万代不易の面と一時流行の面がある。それは俳句にしる、言葉にしる、何事にもそうであり、いつの時代にもある課題だと感じる。いつまでも古いものに縛られていては、新しいものは生まれなし、ただただ一時の流行だけで今まで創ってきたものが台無しになることも避けたい。新しいものを受け入れつつも、大切なことは見失わないようにしたい。

以上、学生の言葉からも古典こそ最初から最後まで全部読む必要がなく、今の自分が理解できる部分だけで十分であることがわかる。

5 真実を見抜く批判的思考

メディアから受け取る情報には正しく有益なものとは真偽の疑わしいものが混在する。意図的なフェイクニュースや自分の思込み等で真実を見失うことも少なくない。世の中を主体的に生き抜くには、根拠をもとに自分で考え判断し、取捨選択していかなければならない。要するに物事の真偽を見極める批判的思考が求められる。

情報や知識は、鵜呑みにせず、まずは疑ってみる。多角的視点から情報や知識に光をあて、吟味・検討を加えていく。その繰り返してしか真偽を見分ける感覚は磨かれない。

筆者が担当する「論作文技術(1)」でフェイクニュースを取り上げた際、授業レポートには情報への正しい向き合い方や危機感が窺える、次のよ

うな主体的意見が多数を占めた。

○「見分ける力を身につける」、それは事実を知ることであきらめず、常に追い求める姿勢をもつことが大切であると私は考える。

○モノを多方面から考える力が大切だ。情報網が発達し、瞬く間に世界中へ広がるようになった現代社会では、自分で取捨選択をしなくてはならない。まず、「本当に?」、「何で?」と意識して疑問を持つことを習慣化すべきだ。

○私たちは、情報を提供する際には、その根拠を明らかにして聞き手を説得する必要があり、情報を受け取る際には、正確性を欠いた情報を安易に信じるのではなく、根拠を見つけ出すことで情報の正誤を見極める必要がある。

○自分が伝えようとしている情報をいかに事実に基づいて受け手に伝えられるか、また、嘘の情報をきちんと見分けることができるかが、現代人に試されているのではないだろうか。一つの情報を鵜呑みにするのではなく、複数を比較することが事実への近道だと私は考える。

○フェイクとファクトが混在している中でたった一つの情報を手にしただけでは、それが事実であるかは判断できない。そのため、多くの情報が必要なのである。(略) それ以外にも重要なことは、書き手の心証も混ざった文章にも気をつけなければならないということだ。情報を受け取る時の印象は人それぞれなので、事実とは別のものとして捉えなければならない。

6 読書知を経験知に変換

情報や知識は持っているだけでは、単なる「もの知り」にすぎない。必要なときに、必要なことを、即座に取り出し、効果的に活かしてこそ価値がある。これは本学の建学の精神「教育即生活」とも完全に一致する。

ショウペンハウエルは、「絶えず読むだけで、読んだことを後でさらに考えてみなければ、精神の中に根をおろすこともなく、多くは失われてしまう」と述べる^(注11)。

非常に刺激的な言葉だ。読書するだけではもの

を考える苦勞がない。それが結果的に自分でものを考える力を失わせる。だから、読書から得た情報や知識は熟慮し、実践の篩に掛けて磨き続けていかなければならない。

「ポスト真実」が囁かれる時代、初年次教育で形成する課題解決力の意味は極めて大きい。森羅万象に不易流行があるように、たとえ状況が変化しても本質を見抜き、適応する知恵と工夫をこらす。そして進化していく。その繰り返しである。読書から得た情報や知識(読書知)は、そのための素材であり、かけがえのない道具となる。

読書知は実践の場で絶えず磨き続け、使い勝手のよい自分の経験知に変換していくべきである。物事をまずは疑ってみる。決して鵜呑みにしない。問いや仮説を立てて確かめる。そうすれば、思考停止にならずにすむ。何よりも主体的に学び、生き抜く力を培うことになる。初年次教育の要諦は解決すべき課題から逃げず、自分で考え、判断し、実行する経験を確実に積ませることにある。

[参考文献]

烏賀陽弘道『フェイクニュースの見分け方』

(新潮社 2017)

楠見孝・道田泰司編『批判的思考』(新曜社 2015)

鳩山玲人『世界のエリートは10冊しか本を読まない』
(SBクリエイティブ 2017)

溝上慎一『大学生の学び・入門』(有斐閣 2006)

注1 文部科学省『別冊初等教育資料中央教育審議会答申全文』(東洋館出版 2017)

注2 文化庁「国語に関する世論調査」概要 (2013)

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h28_chosa_kekka.pdf (参照 2017/10/11)

注3 大学生協「学生生活実態調査の概要報告」(2016)
<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>
(参照 2017/10/11)

注4 「大学設置基準で定められている予習・復習時間について」(参照 2017/10/11)

<http://www.ohshiro.tuis.ac.jp/~ohshiro/univlaw.html>

注5 川嶋太津夫「21世紀スキルを学ぶ機会としての読書」『大学教育と読書』玉真之介編著(大学教育出版 2017) 18-22

- 注6 藤原宏「国語学力論序説」『思考力を育てる国語教育』藤原宏編著（明治図書 1987）20-22
- 注7 ベネッセコーポレーション『進路選択に関する振返り調査—大学生を対象として—』
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2006/06/03data_jituzo_01.html（参照 2017/09/20）
- 注8 小林秀雄「信ずることと考えること」（1974）
『小林秀雄 学生との対話』国民文化研究会・新潮社編（新潮社 2014）154
- 注9 本居宣長『うひ山ぶみ』全訳注 白石良夫（講談社 2009）53-54
- 注10 「三冊子」（『赤冊子』）『話に生かす日本の古典』渡辺富美雄他編（ぎょうせい 1986）92-95
- 注11 ショウペンハウエル『読書について』斎藤忍随訳（岩波書店 1983）129